リレーエッセイ

若者へのメッセージ54

公益財団法人　日本スポーツ協会　専務理事　森岡　裕策

【第一回】スポーツとの出会い

和歌山県の小さな町で育った私は、自然や遊びとスポーツが好きな子どもだった。中学でバレーボールと出会い、本格的にのめりこみ、仲間と一緒に全国大会や国体にも出場するようになっていった。

身体を動かすことが好き

私は、日本が高度経済成長真っ只中の昭和35（1960）年、和歌山県の人口約1万7000人（当時）の湯浅町という小さな町でごく一般的なサラリーマンの家庭に生まれた。町は醤油発祥の地ということもあり、蔵のある一帯は、醤油の香りが漂っていたのを覚えている。

幼い頃、祖母や父母に海水浴や潮干狩り、川遊びなど野外に連れて行ってもらった。

一方、父方の祖父は、私が生まれた時には亡くなっていた。昭和19（1944）年、祖父は陸軍将校として戦争に従軍し、ガソリンを満載した富山丸という大型輸送船に乗り沖縄に向かう途中、米国の潜水艦から魚雷攻撃を受け、鹿児島県の徳之島付近で撃沈された。当時16歳だった父から、この話を幾度も聞かされた。

そういう経緯から、父が存命中、毎年7月の靖国神社での「みたままつり」には、祖父への献灯を探しに、父に代わり娘や孫を連れて家族でよく参拝した。

特別に教育熱心な両親ではなかったが、小学

森岡　裕策（もりおか・ゆうさく）

1960年、和歌山県湯浅町生まれ。中学校からバレーボールを始め、全中、春高、インターハイ、国体（現国スポ）、インカレなどの全国大会へ出場。83年、筑波大学体育専門学群を卒業。2006年、筑波大学大学院修士課程体育研究科を修了。初任地として東京都立富士高校において勤務後、和歌山県教育委員会保健体育課、県立和歌山北高校を経て、1995年、文部省（現文部科学省）体育局生涯スポーツ課に入省。その後、文部科学省スポーツ・青少年局競技スポーツ課専門官から2005年和歌山県教育庁スポーツ課長に出向。文部科学省スポーツ・青少年局体育官、同スポーツ振興課長、日本スポーツ振興センター（JSC）審議役を経て、18年、公益財団法人日本スポーツ協会（JSPO）常務理事、21年、現職に就任。

生の頃、硬筆、そろばん、英語教室には通わせてもらった。

和歌山県は昭和46（１９７１）年に第26回国民体育大会（黒潮国体）の開催を控え、小学生は、町の実施競技となるバドミントンを全員参加で実施した。さらに、放課後、小学校のグラウンドでの野球や隣町のスイミングスクール、夏休み中の学校のプール教室にも参加し、一年中何かのスポーツに夢中になっていた。とにかく外で身体を動かすことが好きであった。

小学5年の時、黒潮国体が開催され、紀三井寺公園陸上競技場での総合開会式を観覧した。その時、将来自分がまさか国体に出場し、開催運営や改革にも携わるとは想像もしていなかった。初めて観（み）る大規模なスポーツイベントが大変楽しく、華やかであったことに感動したことを覚えている。

5歳ごろの筆者（ヘルメットを被っている方）

バレーボールに釘付けになる

小学6年の9月、１９７２年に西ドイツ（当時）のミュンヘンでオリンピックが開催された。私は初めて男子バレーボールの試合を観て、釘（くぎ）付けになった。なぜ観ることになったのかは、今も不明である。

準決勝のブルガリア戦では、0－2の劣勢から、ベテラン2人が投入され、3－2の大逆転のフルセット勝ちで決勝に進出した。翌日の決勝は、ソビエト連邦（当時）に勝って上がってきた東ドイツ（当時）と対戦し、危なげなく3－1で勝ち、日本が優勝した。

将来、現場で何度も目にすることになる金メダルの瞬間であった。当時、『ミュンヘンへの道』というアニメと実写映像を合体させたこれまでにみたことのない番組を観ていた。

現実に金メダルを獲ることになり、まさに漫画のような展開となった。

そのような奇妙で感動する体験があり、漠然とバレーボールというスポーツが気になり出した。そうかと言って、始めるきっかけも機会もボールもなく、相変わらず野球と水泳とバドミントンと遊びに明け暮れていた。

そうした中、地元の公立中学校に入学し、大きな転機を迎える。

ハードな練習を積む

中学校で出会った最初の恩師が、1年時の担任でかつ男子バレーボール部の顧問であった。漠然と意識していたスポーツが現実味を帯びてきた。顧問からの勧誘もあり、正式に入部した。同級生は入部当時16名。卒業時には13名になっていたが、触ったこともなかったボールに触り、バレーボールとともに歩むことになる人生がスタートした。

同校は、先輩方が県大会で優勝し、全国大会にも出場する強豪チームであり、先輩の中には大阪府の私立強豪高に進学する人もいた。

当時、町内には小学生を教えるスポーツ少年団のようなクラブはなく、同級生に経験者は皆無で、全員が一からの経験となった。顧問や上級生からの指導により、基礎練習を教わった。ほぼ1年間休みがない中での練習の成果もあり、2年時には近畿大会で優勝した。大会で勝つことにより徐々にバレーボールそのものが楽しくなってきた。

その後、同級生13名中6名が同じ地元の高校へ進学した。その6名のうち、4名が1年からレギュラーに入り、国体県予選で優勝し、佐賀国体へも出場することになり、さらにスポーツをすることの楽しさが増していった。